

初めてアメリカの 中学校で教えて

Teaching at an American
junior high school for the first time
(一部)

アメリカの若い黒人学生の苦闘

Struggles of Young Black Students in America

KIMI ORR

初めてアメリカの 中学校で教えて

まえがき

アメリカで日本語を教えていた経験を書き出しているうちに、何か書き出そうとしていることと、脳裏(のうり)に浮かんでくる考えとにずれがあることに気が付いた。

書きながらあの頃あまり定かではなかったことが、書き出すことによって明確に私の脳裏に描き出されてきたのである。アメリカの黒人の生活は貧しく、厳しい。子供たちも“環境の産物”的に育てられ、親と同じ様な生活を追う。政治家はそのような彼らをサポートしている“ふり”をしているが結局は利用しているだけなのである。それが黒人の悲劇を生んでいる。

黒人にもいろいろな組織がある。政治家はそのすべての組織に膨大な資金を投げ込み、その組織のリーダーたちは、新たな膨大な投げ込みを期待して、政治家たちの思惑通りに動く。このようなリーダーが正当な考えをもって、貧しい黒人たちの生活向上や、青少年の未来のために何かまともなことができるはずがない。一番の被害者はその底辺にいる貧しい黒人たちである。また殆どこれらの黒人たちはリーダーの思うとおりに動く。それがなお彼らの不幸を導いていくことになる。黒人たちは進んであがきながら自立を目指して現状から抜け出す以外、彼らの発展はあり得ない。

そのような現実を見て、授業中、生徒たちの屈託な表情を見ながら、彼らの厳しい未来に思いをはせて、やるせなくなるのが常であった。

“自分で稼ぐ”っていうことは単に金銭的なことだけ意味しているのではない。職場には人間関係が必須であり、働く能力が試される。教えられ、学び、苦あり、楽あり、そこにまた人間形成がはぐくまれ、それと並行して自立精神が育てられる。それが人生に他ならない。その反対に自分の生活を人に委ねてしまえば、自分を育む貴重な過程を放棄しているということである。目の前のキャッシュには魅力がある。しかし何の努力もせずにそれにしがみつけば、未来は閉じられる。少なくともその時はそういうことに気付いていない。

23期 KIMI ORR
(旧姓 金村 紀美子)



初めてアメリカの中学校で教えて（一部）

— アメリカの若い黒人学生の苦闘 —

アメリカの中学校で日本語を教えて三年。“ジョージア州”的ほとんどの学校での第二外国語はスペイン語なのである。にもかかわらず中学校だけが日本語である。というのは校長先生が軍隊出身で、かつて沖縄や日本本土に駐留したことがあるという。そこで彼は日本の教育や文化を高く評価するに至ったこと。それで生徒たちが日本の教育、習慣や、マナーを学ぶことによって、彼らの日常生活における姿勢を正し、自尊心を高めることを望んでのことである。

私がこの学校で教え始めたころには“ジョージア州でworst school”(最悪の学校)と言うレッテルが貼られていた。全国統一テストもこの8年間平均に満たなかったとのこと。この中学校は90%以上が黒人で、そのほとんどの家庭は生活保護を受けている。そういう生活が親、子供、そして孫と三代まで続くと、それが当然のような生活になっていく。政府から配分される生活保護は最小限度のもので、努力して稼ぐことを学ばなかつた彼らの金策方法は、ドラッグやコカインの売買などで、殆どが犯罪に関する行為である。



City of Augusta

アメリカ合衆国ジョージア州
オーガスタ市。
ジョージア州では、アトランタに
次いで2番目に大きな市であり、
都市圏である。

今、黒人たちとはそのような生活に何の進歩も見えない自分たちに気づきはじめた。何とかこのような生活から抜け出そうと、あがく黒人たちの苦悩は並大抵ではない。だが世間の目は彼らに厳しいもので、彼らに投げる否定的なエクスペクテーション（期待）は彼らの進歩や成功を挫く。また、黒人たちの生活の改善や環境の発展に尽くすべき政府、教育委員会、学校、そして青少年の育成に努力すべき黒人組織も結局、世間が彼らに投げかける見解と同様で、これらのあるグループは只、自分たちの利益になることだけに固守している。一方では援助しているといえども彼らに「何が必要であるか」ということに対する把握の欠落で、すべてが元の木阿弥になる。それゆえに黒人たちの苦悩とあがきはいつまで経っても消えることは無いのである。

日本語を習い始めた頃には「この本はどちらから読むの」って日本語の本をさかさまに見ていた子供たちでも、三年目となると平仮名や勿論ある程度の漢字も読めるようになり、たくさんの日本文化を理解し、興味を示してきた。そしてそれ以前に想像もしなかったことなのに、「日本に行ってみたい」と言うようになった今、彼らの一番の夢は「日本に行くこと」だという。私にとってもうれしいことで励みになる。



マスターズゴルフトーナメントの本拠地として世界的に知られているオーガスタ

Photo credit: Augusta Convention & Visitors Bureau

教え始めて最初のころ

学校はもう朝の授業が始まっているのに、遅刻した生徒でオフィスのフロントデスクの前は長蛇の列。授業中はひっきりなしにしゃべる。席を離れて立ち歩く、所かまわず喧嘩する、寝る子、物を食べる子、ガムを噛む、物を盗む。先生に口答えするのは当たり前。こういうことは毎回のこととて、目が離せない。日本語クラスの生徒は成績や行儀の面でより選抜された生徒たちと聞いている。

初めて日本語クラスの教室に入った時、噛んだあとのガムは教室のいたるところに無数に捨てられていた。捨てられたガムは踏まれて真っ黒になっているものもあれば、床にへばりついてどうしようもないものもあった。ご丁寧に壁にもきっちり貼り付けられていた。噛んだガムをところかまわず捨てる。これを見てまず、最初にしたことは、授業中ガムを噛んではいけないこと。学校の規則でも『ガムを噛んではいけない』項目があるにもかかわらず、ほかの先生方はその規則を重要視しないようで、時々先生もガムを噛んでいるのを見て、「ええっ！」と思わせる。生徒たちには『日本の学校では授業中に絶対ガムを噛まない』って教える。そしてこの日本語クラスではそれを実行することを伝えた。

教室の前にゴミ箱を置き、それから毎日授業に来る生徒達を徹底的に注意し、ガムを噛んでいる子がいれば、教室に入る前に、そのゴミ箱に捨てさせた。最初、生徒たちは文句を言った。「ほかの先生は何も言わないのに」。ある子はガムを捨てたふりをし、授業中に噛んでいる子もいた。「口を開けてごらん」って言えば今噛んでいたガムを唇の下に隠したり、呑み込んだりして、自分はガムを噛んでいなかったふりをする。また、ある子は「今新しいのと取り替えたばかりなのに」って文句をいう。



また、「ガムを噛んでいるほうが授業に集中できる」と言ったり。私はどんな言い訳にも容赦しなかった。毎日がその繰り返しであった。徹底したガムの規則はその2か月後に奇跡が起こった。

授業中に誰もガムを噛む者がいなくなった！



一番前の席に座って、いつ来ても居眠りする子がいた。いったいこの子はどんな家庭の子だろうと疑いたいほどである。ある日私は彼に尋ねた。

「あなたのお父さん何しているの？」
「刑務所にいる」 平然と言った
「何で刑務所にいるの？」
「空小切手を何枚もきったから」



彼の思わず返答に私は返す言葉がなかった。そういう父親を見ている彼もやるせないだろうと察した。『子供は親の背中を見て育つ』と言う。これは親のしていることをそのまま受け入れ、親と同じ様に振る舞う子。それに反して、絶対自分の親のように成りたくないと反発する子がいる。と、そのように私は解釈する。このどちらを選ぶかは彼次第だが、私は彼が後者のような子になってくれることを願っている。それ以来私は彼の居眠りもあまり気にしなくなった。



いつも授業中に立ち回る子がいた。彼は黒人なのに白人より肌が白い。いや白人なおブリーチ（漂白剤）をかけたような、白すぎりのような肌をしている。とにかくじっとしている時がない。そしてほかの子の勉強の邪魔をする。『授業中許可なくして席を離れることはなりません』と何回注意しても一向に其れに従う様子がない。アメリカの学校は何回か注意されるとその罰として放課後学校に残される。彼も何回か其れを経験している。でも一向に彼の行儀は直らない。ある日思い余って、

「そんなことをすると、お母さんに言いますよ」っていいたら、
「僕のママはうちにいないよ。刑務所にいるよ」

あっけらかんとしていた。そういえば彼のおばあちゃんがいつも迎えに来ていた。彼の母親のそのような生活姿勢が多分に彼の日常生活にも影響を及ぼしているように思った。

黒人の社会は75%は片親だと聞く。其の理由は父親がいると生活保護者になれない。生活保護に頼れば父親がいなくても生活はできる。この丁中学校は片親の子がとても多い。私はこのような規則があることに驚いた。ということは父親がいても一緒に住めないということになってしまふのである。



PTAの集会

アメリカの学校の参観日は夕方に行われる。これは昼間は子供たちの両親が働いていると言う理由からである。体育館や学校の大食堂でPTAの集会は行われる。初めての体験ということで興味津々である。50人ぐらいの先生方が参加されただろうか。生徒は全校で約400人。先生方の席は大食堂の半分ぐらいを取り巻くように“コ”の字のように席が設定されていた。不思議なことにその日の集会は父兄よりも先生方の人数が多くかった。『へえ、こういうこともあるんだ』と思っていたら、私の横にいた先生が私に耳打ちした。「今夜はただ（無料）の食べ物提供が何にも無いから来る父兄も少ない」、「ええっ！」聞く耳を疑った。

PTAの集会は先生方の紹介を含めて、学校の規則や決まりなどを父兄に知らせるためで、集会は一時間ぐらいで終わった。

今度は先生方と父兄の対面である。何分にも私は初めて私の生徒の父兄に会うので、誰の生徒の親か検討がつかない。ただ、父兄のほうから私に近づいてくるのを待つだけである。見ると私の立っている所から少し離れたところで、会釈しながら私に挨拶してくれている父兄がいた。

私はその方に近づいていって、私も挨拶をした。その方はクラスで一番收拾のつかない子の母親であった。その母親は小柄で優しそうな顔をしていた。で、彼女は私に「I've never been in jail. (私は一度も刑務所に入ったことはないんですよ)」誇らしくいった。

『ええっ！』(という驚きも言葉にならなかった)私は彼女の思わず言葉にどのように対応していいのか一瞬戸惑ったが、素早く「勿論ですよ」と、その言葉を強調して繕った。その方は付け加えた。

「私の子供たちにも私と同じように刑務所に行かないように育てるつもりです」私は彼女の言葉に同意するように何度も頷いた。この彼女との会話から、この辺りはかなり悲惨な環境であることを悟った。どこを向いても犯罪のたまり場のようなところに住んでいる者にとって、『刑務所』に無関係に生活することは、不可能に近いのかもしれない。これは彼女の切実な願いであり、叫びであるように思った。



その人の息子の名前はデクワンだった。デクワンはたいへん行儀に問題のある子だった。日本語のクラスの生徒たちは学校で選ばれたエリートだと聞いていた。成績ばかりでなく、行儀の面でもよく出来た子供たちだと。其れなのになんでデクワンみたいな子が日本語クラスに、、、といつも思っていた。授業中じっとして黒板にかかれたものをノートに写すとか、先生の言っていることを、じっと聞ける子ではなかった。大人しいと思えば寝ていた。其れも机の上に頭を持たせてではなく、フロア（床）の上でぐっすりと寝るのである。そんなとき、私は起こさないで、そのまま寝かせておいた。静かでほかの人のためになったから。

ある時、クラスのみんなにアニメを描かせていた。アメリカの子はアニメにとても興味を持っている。その時、デクワンが私の机の前に座っていいかと聞いたので、なぜだろうと思いながらも彼の机を私の机の前に持っていくことを指示した。どこに座っても一生懸命するならいいと思った。しばらくして、椅子に座ってアニメを描いているはずのデクワンの姿が見えないので、どうしたのだろうと、彼の机に近づいて行ってみると、彼はフロアーに座り、私の机の下から何か引っ張っていた。『何してんのん』って、よく見ると、机の下に置いてある私のカバンを取り出そうとしていた。ああ、そうだったんだ。



ある時デクワンに「大きくなったら何になるつもり」って聞いたら。

「ギャング！」 「ええっ！」 彼の言葉に仰天した！

この辺りは若者のギャングがはびこっていると聞いていたけど。住んでいる環境は、強く子供たちに影響する様である。アメリカ有名なブレインサーダリ（脳外科手術）のドクターがいる。彼もこのような環境の中で育てられたという。貧乏だったので、いつもお金を見せびらかし、格好よく革ジャンを着て、オートバイに乗っているギャングにあこがれたものだといっている。今もって、デクワンの母親の言葉が耳に響く。

“盗む” ということにあまり罪意識がない

日本語クラスなので生徒たちが興味ありそうな日本独特な箸、風呂敷、暖簾等を展示したり、壁に掛けたりしながら、教室をできるだけ日本的に見えるように心がけた。ところが展示したお茶碗やお椀なんかいつの間にか無くなってしまう。見ると箸は一つの間にか生徒たちの髪留めになっている。風呂敷も古典豊かに歌麿の浮世絵が描かれているものを2、3枚壁にかけていた。授業が終わって皆が出て行ったあと、新入生の二人の女生徒が壁に掛けてある風呂敷を食い入るように見ていて、そのひとりが顎を擧げてもう一人の子に何か合図をしていた。私は素早く彼らの意図をキャッチし、「へい、あんたたちそこでなにしているの？」二人とも、そこにいる私の存在を始めて気付いたかのように私を見た。「急がないと次のクラスに遅れるよ」 その言葉に押されるように彼女らは教室を出て行った。



クラスで彼らに興味のあるような写真を回し見させると、その写真は途中で消え、私のところには戻ってこない。本を貸せば、彼らが教室を離れる前に戻すことを確かめなければと気が走る。ほんのちょっとの隙を見せるとマジックのように何冊か消えていく。鉛筆、クレヨン、カラー鉛筆など、使った後は戻すべきなのに見る間になくなっていく。生徒が学校で必要なものは学校がすべて支給してくれる。“フリー”ということで彼らは物を大切にしない。授業が終わり、生徒がみんな教室を出ていくまで全く気を休めることはできない。



タイローの悩み

タイローは勉強の良くできた子だ。私のクラスに3年間留まっている。でも最近彼の授業中の態度が以前とかなり違っていた。何か元気がなく、授業にもあまり興味が無いようだった。居眠りしていることもしばしばだった。そういう彼の態度にも私は何も言わなかった。ある時突然私に聞こえよがしに、「My sister is a prostitute！」（僕の姉ちゃん売春婦なんだ！）絶望的な思いで彼は言ったのかもしれない。

「ええっ！」思わず彼のほうを見た。彼は眼を伏せるように頭を垂れていた。とても沈んでいるようだった。彼の姉だから高校生のはず、、、信じられない！中学生の彼がこんなことで悩んでいるなんて、、、私はただ聞いて聞かない振りをした。私にとってそれが精いっぱいだった。こんな時、私は彼に何ができるだろうか、、、

この時から5、6年の後、私は夜、学校で教えていた。昼間、定職もなく時間を持て余していた。それじゃあ、と、また大学に戻ることにした。以前からアメリカの歴史を学びたかった。ちょうどその頃、大学のキャンパスでタイローが大きな黒いカバンを重そうに背負って前かがみに歩いているのを見た。ああ、タイロー！思わず彼の後姿を目で追った。タイロー頑張ってるんや！そうや、頑張るんやで、、、私の口元がほころんでくるのが分かった。

サイクルを繰り返す

タキイシャはとてもいい生徒であった。日本語に大変興味を持ち、熱心に勉強した。ところが彼女の態度が豹変した。授業中の態度が悪くなり、私にも頻繁に口答えした。何となくそういう彼女が気になり、彼女宅に伺うこととした。家がなかなか探せなくて、電話したら、タキイシャのおばあちゃんが私が立っていた家の前から出てこられた。家は古くて小さなうちだったが一軒家だった。リビングルームのドアのすぐ横にクリスマスツリーがあったがプレゼントは見当たらなかった。その横にベッドの上ではなくて、板の間のところでタキイシャのお母さんが病気で寝ておられた。何か骨が自然になくなっていく病気で治る見込みはないとのことだった。横向けに足を“くの字”に曲げて寝ておられる姿が薄手の毛布の上からあからさまだった。私の目からでも彼女はとても小さくみえた。ドクターアポイントメントに行くときはおばあちゃんがその病気の娘を背中に負ぶって車に乗せて連れていくという。

「私も、もう62歳を過ぎていますので本当にたいへんなんですよ」
彼女は続けた。「そんなときは家に帰ってきて、疲れ切って何もできないのです、、、」子供が年老いた親を背負ったら親孝行という言葉がある。では年老いた親が娘を背負うことはなんていうのだろう！そんなことを考えながら、この家庭にも男手は無いようだ。．．



タキイシャのことはもう何も言わないで置こうと思っていたが、おばあちゃんから持ち出してきたので端的に話した。「このような家庭の状況なので、なかなかタキイシャにもかまってやることも出来ない。でもこの件に関して彼女と話してみます」といわれた。

学校が冬休みに入る前に私はまたタキイシャの家に向かっていた。プレゼントの無かったクリスマスツリーを思い出しながら。



アメリカは小学校や中学校でも落第はある。だから平均単位はいつも確保しなければならない。日本語のクラスは学年末に成績や態度の悪い子ははずされる。タキイシャは日本語クラスから外された。それから何ヶ月か経ったが、ついぞ彼女に会うことはなかった。風の便りに彼女は妊娠していると聞いた、、、ただ、信じたくなかった。嘘であってほしい！それ以前にも私は学内で妊娠している二人の女の子を見た。その時、驚きとショックで彼女たちから目が離せなかった。信じられなかった！彼女らは12歳か13歳である。その子たちは仲良さそうに一緒に歩いていた。別に恥じてる様子もなかった。彼女たちのおなかは目立つほど突き出していた。ジョージア州の規則で妊娠して6週間過ぎると墮せないという。ということは彼女たちは産むつもりなんだ。たぶん出産の後、もう学校には来ないだろう。そうなんだ、中学校教育もろくに終わらないで彼女たちは実社会に出ていく。私は生活保護のことを考えていた。14歳で子供を産んだ母親の子供も、14歳で子供を産んだときいた。これはサイクルだという。サイクルの中にはまってしまうとなかなか抜けきれないときいた。アメリカでは十代の妊娠が問題になっているが、私は高校生のことばかり頭にあった。

ある黒人が私に話した。1967年アメリカ政府は黒人社会に驚愕なキャッシュ（現金）をばらまいた。貧しい黒人たちはそれに驚喜した。長年の間、労働する能力のあるものも彼らは努力することなく、お金を与えられることを教えられた。この政府の行為によって完全に黒人たちの自由と、個人の発展を剥奪された。彼らは今、そういうことに気付きました。

『お前は黒人なのか、白人なのか？黒人なら俺に投票するのが当たり前だろう！』ある政治家が一人の黒人を前にしてのテレビインタビューでの会話であった。政治家は決して黒人たちの生活の改善など考えていない。この膨大なグループがいつまでも自分たちを頼ることを願い、ただ政治家たちの脳裏はどれだけの投票を彼らから確保できるかカウントすることだけを考えている、、、これらの黒人たちはアメリカの政治家や社会から作り上げられた犠牲者なのだ。黒人社会は犯罪で氾濫している。彼らの苦悩や、そこから抜け出ようとするあがきも一般社会において、彼らを受け入れる用意はない、ただ、そこに居座るしかないのだ。

（一部/完）

